

令和元年6月21日（金）

「財務大臣兼金融担当大臣麻生太郎君 問責決議案」

賛成討論

国民民主党・新緑風会 古賀之士

国民民主党・新緑風会の、古賀之士です。ただいま議題となりました「財務大臣兼金融担当大臣麻生太郎君問責決議案」について、会派を代表して、麻生大臣には、「国の根幹である財政や金融を司る資格はない」として、賛成の立場から討論いたします。

討論に先立ちまして、去る18日に発生した新潟県・山形県地震において被害に遭われた皆さまに、心からお見舞いを申し上げます。梅雨の時期、現地では二次災害の発生も予想されます。政府には、人命第一の対応をとられるよう要請いたします。また、災害への対応に関しましては、与野党関係ありませんので、私ども立法府としても真摯に行動することを、この議場の皆さまに呼びかけます。

「ザ・バック・ストップス・ヒア」。これは、アメリカのハリートルーマン大統領の言葉です。「責任はここで止まる」「最後の責任は自分が取る」という意味で、政治の決断の重さ、そしてリーダーの覚悟を表す言葉として、よく知られています。

議場の皆さま、考えて下さい。先日発表された、金融審議会の市場ワーキング・グループ報告書の件で、政治の決断やリーダーの覚悟が、いったいどこに見られたでしょうか。本院の財政金融委員会や厚生労働委員会、そして国家基本政策委員会などにおいて、野党の議員が真剣に問いかけましたが、関係する各閣僚に、決断や覚悟のかけらさえも見当たらなかったのが現状です。

とくに、麻生金融担当大臣においては、自らが諮問した問題にも関わらず、あろうことかその報告書の受取りを拒否するという、常識では理解に苦しむ行為まで行っています。この報告書は、「高齢社会における資産形成・管理」というタイトルが示すとおり、国民生活に大きく関わる重要な内容です。それを、「気に入らないから受け取らない」とは、何事でしょうか。しかも、「政府のスタンスとは異なる」という、恥の上塗りとしか思われない言い訳まで披露しました。

麻生大臣の所管する金融庁は、言うまでもなく金融機関の検査を任務とする省庁です。その金融検査において、例えばある銀行に大きな問題が見つかったとしましょう。その時、金融庁に呼び出された金融機関の担当者が、「当行のスタンスとは異なる」などと言って、検査結果の受取りを拒否することが許されたら、果たしてどうなるのでしょうか。わが国の金融行政は、根底から崩壊してしまうことでしょうか。これと同じことを金融担当大臣が堂々としていることに、われわれは慄然といたします。金融機能の健全性の維持のためにも、麻生金融担当大臣の職務をこれ以上続けさせるわけにはまいりません。

さらに、政治の責任と今回の報告書との関係については、吏道（りどう）とも言うべき、官僚のあり方についても暗い影を投げかけることになりました。国会の委員会において、金融庁の局長が頭を下げた、いや、無理矢理に頭を下げさせられたことに、私は強い憤りを感じています。この報告書をまとめた金融庁の担当局長は、有能な官僚として、金融に関わる分野では知らない人はいないくらいの存在です。今回の報告書も、局長をはじめとした金融庁の「ベスト&ブライテスト」が、この国の未来を心の底から憂い、問題を真摯に検討した結果、生

み出されたものであることは明らかです。

それが、突如として荒海に放り出されることになりました。海の世界ならば、船長が「責任は俺が持つ」として、一丸となって危機を乗り越えて行くことでしょう。しかし、金融庁の船長たる麻生大臣は、あろうことか部下に責任をなすりつけ、自分だけが救命ボートに乗るような見苦しい行動に出ました。吏道に従って行動してきた金融庁の職員たちは、さぞや歯がゆい思いをしたことでしょう。このままでは、困難に立ち向かう勇敢な船員のような官僚ではなく、上ばかりを見るカレイやヒラメのような役人たちが増えていくこととなります。

国会が終われば、霞ヶ関は人事の時期を迎えます。この国のために真面目な仕事をした官僚に、詰め腹を切らすことがあってはなりません。わたしたちは、彼らのためにも、そして霞ヶ関全体の今後のためにも、リーダー失格であることが明らかとなった麻生大臣を替えることで、官僚のあるべき行動様式を取り戻さなければなりません。行政府に問題があればそれを質することが、立法府の義務である、そのように議場の皆さまに申し上げておきます。

もっとも、麻生大臣によって吏道が曲げられたのは、今回が初めてではありません。森友学園を巡る問題において、決裁文書の改ざんが行われました。われわれ野党は早くから疑念を抱き、木で鼻をくくったような答弁を繰り返す理財局長の責任を繰り返し問いましたが、麻生大臣は逆に国税庁長官へと昇進させました。この人事によって、財務省への国民の信頼は大きく傷つきましたが、それとともに、理不尽なことでも平気で行うという気運が霞ヶ関に広まりました。先ほどカレイやヒラメの例を挙げましたが、まさに、「魚は頭から腐る」という言葉そのものであり、人を見る目がない財務大臣を今こそ取り除かなければ、官僚機構全体が立ち行かなくなるでしょう。

また、そもそもこの報告書に携わった、金融審議会市場ワーキング・グループの委員の方々は、日本の英知そのものと言っても過言ではないほどのメンバーです。その委員たちが長い間かけて議論してきた報告書を、自分たちに都合が悪いからといって受けとろうとしないのは、まさに不誠実の極みです。政治の責任を果たしていないのは当然ではありますが、それ以上に、学問への軽視、実務への侮辱、そして知識への拒絶に他ならず、まさにこの点こそ、われわれが問責

決議を提出する理由でもあります。

また、ワーキング・グループの委員は、総理大臣による任命と聞いています。委員の方々は、高い能力や十分な識見はもちろんのこと、総理による人事の辞令を持っているわけですが、その権威を一顧だにせずに報告書を突き返す傲岸不遜な姿勢については、安倍総理ですら内心は苦々しく思っているに違いありません。

政府は選挙が終わるまで隠そうとしているようですが、年金の財政再検証が、いずれ発表されます。前回行われた再検証では、将来の見通しについて8通りの試算が示されました。5年が経過した今、改めて現状を検討すると、残念ながら最悪のケースに近い道筋をたどっていることが分かります。

つまり、今回の財政再検証が示す年金の未来については、恐らくは思わず受取りを拒否したくなるようなこととなっているでしょう。しかし、危機に瀕したダチョウのように砂に頭を突っ込んで見ないふりをして、問題は解決しません。議場の皆さま、われわれには、大きな責任が課せられています。財政再検証が明らかになった暁に

は、国民の老後の安心を取り戻すため、与野党を越えて年金問題に真っ先に取り組んでいくことが必要だと、今からそのように呼びかけておきます。

冒頭に、トルーマン大統領の言葉を紹介して、麻生大臣の責任について問いかけました。実は、トルーマン大統領は別の言葉も残しています。それは、「納得させられない時は、混乱させることだ」というものです。皮肉なことに、麻生大臣は、こちらの言葉についてのみ、忠実に実践されているようです。つまり、リーダーとしての責任は無視したあげく、混乱だけを引き起こしているというわけです。自らの責任を棚に上げ、下の者のせいにして逃げてしまい、さらにそれを糊塗するためにわざわざ混乱を引き起こす。こうした姿勢が、国の根幹を司る、財務大臣及び金融担当大臣としての任に相応しくないことは、火を見るより明らかでしょう。麻生大臣は先日、G20 財務大臣・中央銀行総裁会議を、地元の福岡で終えられたばかりです。まさに、故郷に錦を飾ったわけですから、これを花道にして、潔く身をひかれてはいかがでしょうか。

私は、福岡でニュースキャスターを務めていました。ここでこうしてこの文言を読み上げてはいますが、実は麻生大臣とは長い付き合いであり、心の中は複雑な心境であります。しかし、まさに、その私だからこそ、切腹における介錯人の役目を全うすべきだ、今はそう考えております。麻生大臣におかれましては、私の想いをどうかお汲み取りいただき、この問責決議案が可決される前に、自ら職を辞することを強くおすすめていたしまして、賛成討論を終わります。ご清聴、誠にありがとうございました。